

100年住み継ぐ家づくり

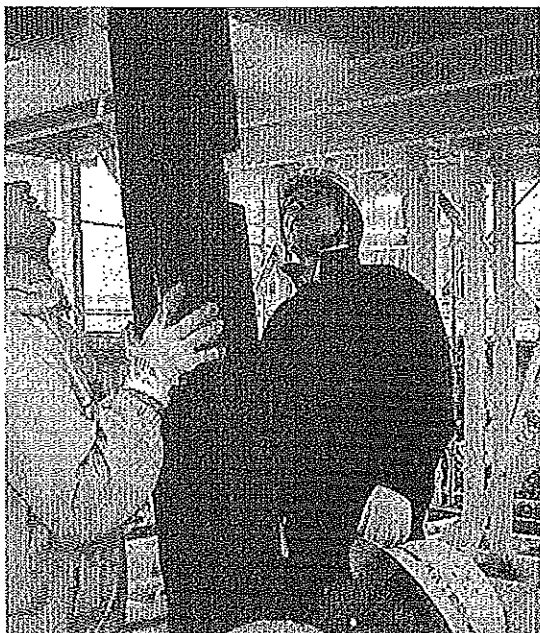
建設から長年たった古民家。これを壊さずに再生したり、使われていた木材を新築の家に再利用したりすることに、札幌市中央区の建設会社「AI建築」が3年前から取り組んでいる。

きっかけは2008年秋のリーマン・ショックだった。新築の需要が減り、1級建築士の江崎幹夫社長(58)が他社との差別化を模索していた時、増毛町で築100年の古民家に出あった。良質な国産木材



AI建築 (札幌)

築50年以上の古民家再生・再利用



新築現場で、再利用する古材を取り付ける様子を見る江崎幹夫社長(右)＝札幌市清田区

が丸ごと使われ、安価な外国産木材とは違って柱や梁などがまだしっかりしていた。

江崎さんは「良質な木材は100年経つと密度が増し、強度も増すと学んだ。小さなところが大手に勝つには、手間をかけてこつとした古材を残すことが大切と考えた」と振り返る。

これまで再生は3件手がけた。札幌市の築50年の82平方メートルの2階建ては一部を解体

AI建築 2005年に設立。資本金500万円。社員4人。江崎幹夫社長は北海道古民家再生協会の理事長も務める。定期的に古民家鑑定士の現地実技講習会、古民家フォト甲子園(高校生対象)などを開いて普及に努めている。問い合わせは同社(011・643・2077)へ。

し、①寒さに強い断熱材の活用②使いやすい水回りの整備③耐震補強――などでよみがえらせた。費用は400万～500万円。状態にもよるが、柱や梁などを再活用できる分、新築より安くあがるといふ。

古材を機能面やデザイン面で生かした新築物件は、10件以上にのぼる。居間のカウンターやクリニックの照明に活用したり、柱材として再び使ったりした。

依頼主は最初は知り合いの紹介が多かったが、少しずつホームページやブログを見て問い合わせしてくる人が増え

た。江崎さんは、財団法人「職業技能振興会」が認定する古民家鑑定士でもある。2008年の総務省の統計では築50年以上の古民家は道内に約5万6千棟あるといい、各地に赴いて古民家の価値を鑑定して再生方法などを提案している。

「古民家は手直しすれば、築80～100年は住み継ぐことができる。環境負荷の少ない家をふやすためにも、再生に取り組み仲間をもっと増やしたいですね」と話している。(石間敦)

今回は「ここがスコイ」として、かつて全国的に知られていた地元の家がイモを自然の水で貯蔵して付加価値を高め、販路の拡大に取り組み稚内市の「山本建設」を紹介する予定です。

古民家の魅力 再評価

道内で、明治から昭和初期にかけて建てられた古民家を再活用する動きが広がっている。道は、全国各地から入植した人々が開拓した歴史があり、古民家には様々な建築様式が見られる。北海道古民家再生協会の江崎幹夫理事長(57)は「所有者が価値に気付いていない場合も多く、地域全体で古民家を文化として残そうとする意識作りが必要」と提案している。

保存の動き 広がる

「落ち着いていて、居心地がいいですね」

そばと日本料理の店「おかだ紅雪庭」に来たビジネススマンや近所の人は食事をしながら、古い梁や建具を見渡して楽しんでいた。

この建物は、旭川市中心部にある清酒北の誉の創設者・故岡田重次郎氏が1933年(昭和8年)に建築した「旧岡田邸」。和洋折衷のモダンな造りで、床や天井、柱備え付け家具などはそのまま活用されている。

旧岡田邸は取り壊しの危

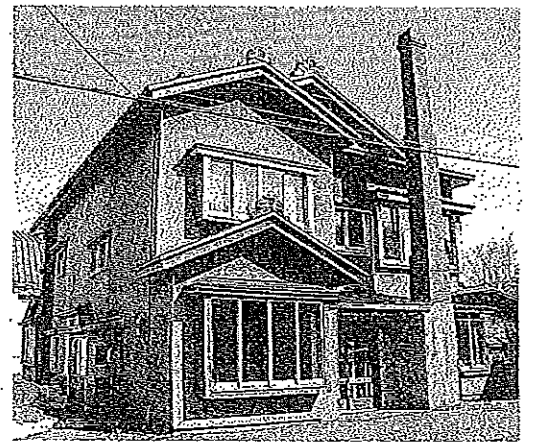
機もあったが、歴史的価値を見いだした市内の有志が財団を設立。約6000万円の資金を集めて保有者が買い取り、再生した。

稚内市では先月29日、沖合底引き網漁業で栄えた時代を象徴する「旧瀬戸邸」

の一般公開を始めた。旧瀬戸邸は、瀬戸漁業部を経営し、全国北洋底曳網漁協組合長も務めた故瀬戸常蔵氏が49年(昭和24年)に建て

た。最高級のスギ材をふんだんに使った木造2階建て

で、2007年に親族から



そばと日本料理の店として再生された旧岡田邸(赤いしん方の煙突が特徴の旧瀬戸邸)

譲り受けた市は外壁や屋根を修復。当時の食器や金びょうぶ、ちゃぶ台、古いラジオなども展示し、200

吟漁業規制以前の水産業の興隆を伝えるパネルも置いた。市教委の斉藤謙一学芸員は「子供たちの学習にも

役立てたい」と話す。北海道開拓を支えた築100年前後の古民家が16軒

残る厚真町では、今年度予算に保存計画作りのなどの事業費約130万円を計上

し、町として古民家保存に乗り出す。札幌市立大の羽

深久夫教授(建築史)の調査では約60軒の古民家があることが判明。「古民家マップ」を作り、観光施設などに置く計画だ。秋頃には、

富山県の伝統民家形式「梓の内」で作られた古民家の一般公開が始める。

古民家保存の動きはこれまでもあったが、江崎理事長は「やっと道内にも古民家の価値が浸透し始めた。

道内には、様々な建築様式の古民家があり、それだけに保存活動が本格化する意

味は大きい」と話している。

道内の「古民家」の保存・活用を訴える

ひと 2011

「古民家には長年、住み続けた人々の喜びや悲しみも凝縮されている。奥ゆかしく、美しいたたずまいを守っていききたい」

古民家の保存や活用をPRするため、建築家や主婦、会社員などをつくる社団法人北海道古民家再生協会の理事長。本州に比べて古民家が少なくとされる道内でも、2008年の国の調査では、1950年以前に建てられた一戸建ては2万5800軒あった。しかし、03年の調査か

おさん 夫 幹 江崎



らは2割も減少した。一時とともに醸し出された美しさも、失われるのは一瞬です。同協会では、あめ色に輝く柱や梁が印象的な道内の古民家をホームページで紹介したり、改装方法の相談にも乗ったりしている。

留萌管内増毛町にあった築約100年の民家を移築のため解体したことがきっかけ。「くきをほとんど使わず、木材に切り込みを入れて組み合わせる職人技に引き込まれた」という。

最近、若者から「古民家でカフェを開きたい」との相談が増えているのがうれしい。「古民家は手を加えれば、いつまでも住み続けられることを、もっと多くの人に知ってほしい」。札幌市内で妻と暮らす。56歳。(藤田香織里)

ひと

交差点

道内には築50年以上の木造民家が約5万棟あるという。北海道古民家再生協会の理事長の江崎幹夫さん(56)は「古い家でも耐震補強して断熱材を入れれば、さらに50年は住み続けられる」と大鼓判を押す。

札幌市で工務店を経営する1級建築士。古材のリサイクルに関わるうち、歴史を刻んだ民家の魅力に目覚めた。「古民家鑑定士」の資格を取得し、08年9月に仲間と同協会を設立。古平町の旧ニシン番屋や由仁町の農家など、明治後期〜昭和初期の建物を調査し、保存に取り組む。

木造家屋の魅力の一つが、解体後に柱や梁を再利用でき、廃棄物削減に役立つ

古民家保存に取り組む

点。近年は古材を使ったカフェやギャラリーが



人気で「古い物に新しい価値を見つけて若い人が増えている」と喜ぶ。全国の高校生が古民家を題材に研究発表する「民家の甲子園」も毎年開かれており、参加校を募集中。問い合わせは同協会(011・643・2078)。(岸川弘明)

北の大地の輝き 北海道の中小企業

☆29☆



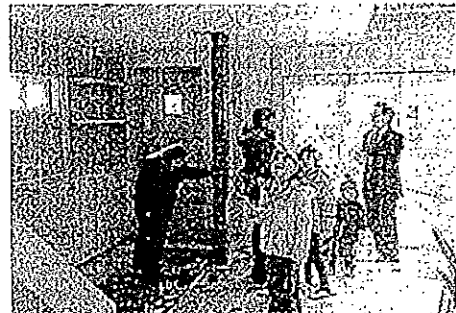
江崎社長

AI建築は築60年以上の古民家が使われていた古材を再活用した住宅の設計、施工監理などを手がける。住宅メーカーに勤務していた江崎幹夫社長が2005年に独立。当初は北海道内屈指のリゾート地であるニセコ

AI建築

で、別荘やペンションなどの仕事を多く受注していたが、08年秋のリーマン・ショックで、受注がバッタリ止まったという。「何か差別化しなければ生き残っていけない」と危機感を持った江崎社長が着目したのが古材。築100年以上の古民家に使われていた木材を解体して内装に活用する住宅建築を、07年にニセコで不

動産業を営む釧路人から受注したことで「古民家の良さを数えられた」（江崎社長）という経験が背景にある。09年夏、古材流通の支援を受けるランチャイブスチェーンに加盟し、「古材のある家」（AI建築のブランド名）を主力事業にする路線に転換した。群馬県で採取した古



昨年12月に開いた古材再活用住宅の完成見学会（札幌市清田区）

▲……… 挙げる古材の魅力は①情緒、温かみ②環境に優しい③強度が高い。古民家の多くが廃棄処分されているという道内でも再活用の機運を盛り上げるため、江崎社長は自ら理事長となり09年に一般社団法人北海道古民家再生協金を設立。古民家鑑定士を主な会員とし、講習会や実地研修などに

古民家材で「温もり」の住宅

材を再活用した住宅2棟をすでに札幌市内に完成。受注はリーマン・ショック前の水準に反りつつあり、11年3月の期の上高は前期比67%増の1億円を見込んでいる。江崎社長が

はなかなか手を出せない「（同）と指摘する。古民家の多くが廃棄処分されているという道内でも再活用の機運を盛り上げるため、江崎社長は自ら理事長となり09年に一般社団法人北海道古民家再生協金を設立。古民家鑑定士を主な会員とし、講習会や実地研修などに

▽社長 江崎幹夫氏
▽所在地 札幌市中央区北1条西27の4の5、011-643-2077